

大分県立杵築高校

ポートフォリオ、グローバル教育、定期考査と、できる改善から推進

大分県立杵築高校が、2018年度1学年の生徒に身につけてほしい資質・能力として掲げたのが「きつき力」だ。そして、大学入試改革に関する情報を収集しつつ、ポートフォリオの活用、3年間を見据えたグローバル教育、思考力・表現力を評価する定期考査への転換と、手探りながらも着実に指導改善を図っている。

● 「きつき力」の育成を目標に、
● 考える力や人間性を育む

2018年4月、大分県立杵築高校の1学年団は、新入生を迎えるにあたり、高校3年間で生徒に身につけてほしい資質・能力として「きつき力」を掲げた。それは、「聞く力」「伝える力」「気づく力」の頭文字を合わせた言葉で、主体的に考え、表現できる力を意味する。

3つの資質・能力の中で特に重視するのが、「気づく力」だ。自分自身の成長に気づくことに加え、集団の中で仲間の長所や強みに気づけるような人間性を高めたいという

思いが込められている。1学年主任の芦刈信司先生は、次のように語る。

「高校は、大学入試という目標があるために、義務教育と大学との間にある通過点と捉える人もいます。しかし、15〜18歳は、人間的に大きく成長する時期です。集団生活の中で変化・成長していく自分に気づいてほしいと思っています」

そうした思いを持ちつつ、1学年の指導を手探りで進めていった。

● ポートフォリオの活用を
● 生徒の成長実感につなげる

1学年団でまず動き出したのは、

ポートフォリオの活用だ。4月上旬、

ベネッセの研修会に参加し、ポートフォリオのねらいや運用方法、大学入試への活用などについての理解を深めた芦刈先生は、多面的・総合的評価への対応とともに、生徒が学習や活動の振り返りを行う重要性を学年団に説明。4月後半には、「JAPAN e-Portfolio」(*1)の活用を決めた。

「ポートフォリオに諸活動の振り返りをまとめることで、個々の活動の成果を集約し、生徒の成長実感や進路選択につなげられると考えました。高校生活で地道に取り組んできたことを多面的・総合的に評価される入試にも、その意義の大きさを感

大分県立杵築高校

◎ 大分県立杵築中学校・大分県立杵築高等学校を前身として創立。「志四海」を校是に、「尚学・剛健・真摯・向上」を校訓とする。2016年度、文部科学省「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」、専門教育政策研究所「教育課程研究指定校事業」の指定を受けた。

◎ 設立 1897（明治30）年

◎ 形態 全日制／普通科／共学

◎ 生徒数 1学年約200人

◎ 2018年度入試合格実績（現浪計）

国公立大は、北海道大、筑波大、京都大、山口大、九州工業大、九州大、熊本大、大分大、鹿児島大、北九州市立大などに72人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西学院大、西南学院大、福岡大、立命館アジア太平洋大などに延べ168人が合格。

◎ URL <http://kou-ita-ed.jp/kituki/>



1学年主任
芦刈信司
あしかり しんじ
教職歴22年。同校に赴任して6年目。国語科。



1学年担任
森本清香
もりもと さやか
教職歴10年。同校に赴任して2年目。進路指導部。英語科。

じました」（芦刈先生）

導入決定後の展開は早かった。「JAPAN e-Portfolio」のフォーマットを参考に、探究活動や学校行事、部活動など、8つのカテゴリーで記入用紙を作成。それを生徒に配布し、1学期間は手書きで記入させ、ファイルにまとめるよう指導した。

*1 一般社団法人教育情報管理機構が文部科学省より「JAPAN e-Portfolio」の運営を許可されて運営する高校 e-ポートフォリオ機能、大学出願ポータル機能を有したサービス。

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

図1 ポートフォリオに入力する項目一覧

全員入力しなければならない項目			
チェック	項目	チェック	項目
	志四海プロジェクト (A P U交流会)		志四海プロジェクト (GLOBAL 講演会)
	トレクリーンアップ		ベネッセ進路講演会
	職業人講話		杵高クリンアップ
	十王祭 (文化の部)		集団面接
	十王祭 (体育大会)		系統別学部学科研究
	校内ビブリオバトル		1年前期委員会・クラス係
	主権者教育模擬選挙		1年後期委員会・クラス係

基本情報登録後に活動内容を入力しなければならない項目			
チェック	項目	チェック	項目
	部活動 (基本情報)		各種実行委員会 (基本登録)
	部活動 (活動内容)		実行委員会 (活動内容)
	生徒会活動 (基本情報)		地域活動
	生徒会活動 (活動内容)		習い事

参加者のみ記録する項目			
チェック	項目	チェック	項目
	英語検定		学ぶ力向上ゼミ
	漢字検定		グローバルリーダー育成事業
	小学校学習補助ボランティア		科学の甲子園
	Kit-sukiになる学生研修		ふれあい看護体験
	私立図書館ボランティア		イングリッシュキャンプ
	しごとフォーラム		SGH 成果発表会
	ソーシャルワーカー体験		

上記以外の入力項目 (※それ以外の項目を入力している場合は、下の枠に項目名を記入すること)			
チェック	項目	ポートフォリオ記録総数	

学期末にポートフォリオに入力する項目の一覧表を配布し、入力漏れがないようにした。
* 学校資料をそのまま掲載。

並行して「JAPAN e-Portfolio」と「マナビジョン」のポートフォリオ(*2)との互換性を確認し、デジタル入力への準備を進めた。そして、夏季休業中の補習時、学級ごとに生徒をパソコン教室に呼び、1学期に書いた内容を「マナビジョン」のポートフォリオに入力させた。さらに、9月には、生徒にスマートフォンを持参させ、各自の端末から入力する方法を説明。ログインや振り返りの仕方などの質問に対応する相談期間も1週間設けた。

そうして1年生全員がポートフォリオを活用できるようにし、日常的な入力は生徒に任せた。また、入力漏れがないよう、各学期末に記録項目の一覧表を配布し、未入力がないよう注意を促している(図1)。
3学期に行った「進路サポート」(*3)の進路探究チェックで「その進路を希望するきっかけとなった出来事」を書く際には、ポートフォリオを見ながら考えさせた。1学年担任の森本清香先生は、その意義を次のように語る。

「高校生活と進路選択のつながりに気づかせることが、この活動の目的でした。実際、教育学部を志望しているのに、それにかかわる活動を何もしていないことに気づいた生徒もいました。自分が経験したことを基に進路を決定すること、進路実現に向けて自分で行動していく難しさを学ぶ機会になったと思います」

ポートフォリオへの入力は2年次以降も続け、最終的には3年次での推薦・AO入試出願前に、蓄積したポートフォリオを活用しながら高校生活を振り返り、自身の進路の決意表明を各学級で行う予定だ。どういった経験が自分を成長させたのか、自分がどんな仕事に就き、どのような生きていきたいのかを、ポートフォリオの記述を踏まえて展望させる。

「教師が指摘するのではなく、生徒自身が自分の変化や成長に気づき、将来に向けての課題を考え、次の行動につなげる機会にしてほしいと思っています」(菅刈先生)

「志四海プロジェクト」で英語活用への意識を高める

英語4技能の育成に向けては、3

年間のグローバル人材育成プログラム「志四海プロジェクト」を始めた(P.20図2)。

「地方部にある本校では、日常生活において英語を使う機会はほとんどありません。そこで、本校の持つ教育資源を生かし、海外に目を向ける機会や外国人と話す場を、1年次から段階的に設けようと考えました」(菅刈先生)

7月、同校から最も近く、外国人留学生が多数在籍する立命館アジア太平洋大学(APU)と連携し、外国人留学生9人を招いた交流会を実施した。外国人留学生に留学先として日本を選んだ理由や日本の高校生へのメッセージを語ってもらい、レクリエーションも行った(P.20写真)。

「生徒たちは、授業でスピーキングの練習をしていても、外国人留学生を前にすると、とっさに英語が出てこずに悔しそうです。『英語力をもっと伸ばしたい』といった声も上がっています」(森本先生)

さらに、11月にはアメリカ・ロサンゼルス在住の卒業生を招いて講演会を実施し、異文化への興味・関心を喚起する機会とした。

19年度に行う2年次での修学旅行

* 2 進路・進学応援サイト「Benesse マナビジョン」において無料で利用できるeポートフォリオ。 * 3 ベネッセの教材の1つで、生徒一人ひとりの視野を広げ、将来の進路について考えるきっかけを与える教材。



*学校資料を基に編集部で作成。

写真 APUの外国人留学生との交流会では、生徒から「表情や身振りで相手の気持ちが分かり、私の下手な英語を真剣に聞いてくれて感謝しました。英語の大切さを実感しました」といった声が聞かれた。

は、行き先を同校で初めてとなる海外として、シンガポールを選んだ。芦刈先生は、以前担当した学年でも修学旅行先を東南アジアにすることを提案したが、治安などの理由で保護者から賛同を得られなかった。今回は、事前にPTA役員に相談してから、保護者の賛同を取りつけた。「大学入試の変化を具体的に予測できない状況が、かえって追い風になりました。今後の大学入試では、英語4技能の習得やポートフォリオに残せるような高校時代の豊かな経験などが求められることを伝え、海外研修の意義を認めていただくこと

ができました」(芦刈先生)
シンガポールの活動では、英語でのプレゼンテーションなどを計画している。そうして全員が海外を経験した上で、3年次には、希望者から4人を選抜し、10日間のロサンゼルス研修を行う予定である。

● ● ● アウトプット重視の指導で 英語4技能を総合的に高める

思考力・判断力・表現力や「きつき力」の育成を踏まえた、授業や定期考査の改善も進めている。

英語科では、16年度から2年間、

大分県教育委員会の指定を受けて、ディスカッションを取り入れた表現活動に取り組んできた。その実績を踏まえ、18年度1学年においても4技能重視の授業を行った。

まず力を入れたのは、ライティングやスピーキングの指導だ。英語を使うことに慣れさせようと、スピーキングのパフォーマンステストの評価は、正確性にはこだわらず、相手に伝われば加点する方針とした。すると、英語を話すことに抵抗感を持たない生徒が増えていった。また、模擬試験において、英作文の問題が無解答の生徒が少なくなった。アウトプットを重視した指導によって、文法は苦手でも話すことは得意というように、多くの生徒が自信を失うことなく、英語学習への意欲を持ち続けられるようになった。

そうした成果を客観的に測るために「GTEC」を年1回受検。18年度1学年は、ライティングとスピーキングで好成績を上げた。

「ライティングやスピーキングでよいスコアを出したことで、生徒は頑張れば結果につながると実感したと思います。自信を持ってアウトプットできるようになった今、

accuracy(正確性)をどのように高めていくかが課題です」(森本先生)

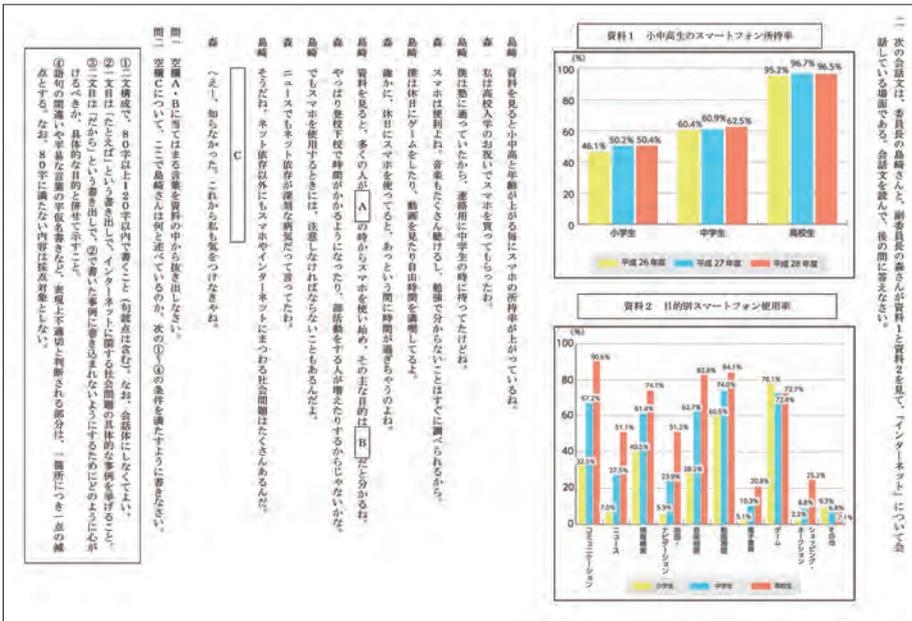
● ● ● 社会とのつながりを重視した 問題を定期考査で出題

国語科では、2学期の定期考査から、教科書の文章に関連した、教科書には載っていない資料やデータ、会話文などを素材とした読解問題を出している。そして、制限字数をやや長めの120字に設定した記述式問題を出し、初見の素材を教科書の文章の内容と比較させたり、日常生活と関連づけて考えさせたりして導いた答えを書かせている。

例えば、杵築市の福祉施策について、教科書の文章の筆者ならどう考えるかを推測させる問題や、グラフを基にインターネットの利用について考察させる問題(図3)などを出題。そして、定期考査後には、生徒の解答を示しながら解説して、「この解答は8点としたけれど、なぜだと思う?」などと問いかけて、資料の読み取り方は正しかったのか、どういった要素が解答に必要だったのかを、生徒に改めて考えさせた。

「難しい評論や架空の小説を読解

図3 国語科の定期考査の問題(抜粋)



国語科では、「大学入学共通テスト」を見据え、グラフの内容を読み取って、自身の考えを記述させる問題を出した。上記の問題は、グラフを見ながら話している高校生の会話を素材としている。記述式問題では、解答にあたって4つの条件を課した。

*グラフの出典は、「平成28年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 調査結果(速報)」(内閣府)。
*学校資料をそのまま掲載。

することが何の役に立つのかと思っ
ている生徒もいます。そういった生
徒にとっても、『大学入学共通テス
ト』の試行調査の問題は、国語を学
ぶ意義を理解することができる有効
な内容だと感じています。大学入試
で国語と日常生活とを関連づけた問

題がこれまで以上に出されるよう
なれば、国語を学ぶ意欲を高めるこ
とができるでしょう(芦刈先生)
作問においては問題レベルの設定
に苦労したが、生徒の解答を見なが
ら、「本文中から抜き出して書きな
さい」などと、生徒の学力に合わせ

て条件をつけるといった試行錯誤を
重ねるうちに、解答を書ける生徒が
増えていった。

「模擬試験でも記述式問題の無解
答数が減り、書くことへの生徒の抵
抗感がなくなってきたことを感
じます」(芦刈先生)

● ● ●
3年間を見通した
指導体制を目指す

18年度は、教育環境や大学入試の
変化に対応しようと指導を変えてき
た。情報が限られる中、改革を進め
られた背景には学年団の共通理解が
あったと、芦刈先生は振り返る。

「例えば、ポータルフォリオの活用
を提案した際、大学入試における有
効性について懐疑的な意見が出るこ
とも予想しましたが、そうした声は
ありませんでした。先生方が大学入
試改革の意義を理解し、生徒の資
質・能力を伸ばすために必要なこと
を『きつき力』を通して共有できて
いたからだと思います」

ポータルフォリオは、生徒の思考を
広げるツールとして機能し始めてい
る。当初は、学習や学校行事の内容
の事実のみを入力する生徒が多かつ

たが、何度も入力するうちに、どう
感じたのか、何を考えたのかなど、内
面を振り返る記述が増えていった。

「ポータルフォリオは、個々の教育
活動を束ねる役割も果たすものであ
り、そういった意味でカリキュラム・
マネジメントの実現の鍵にもなると
捉えています。教育活動の相乗効果
を高めるといふ観点で、取り組みを
精査する資料としても活用したいと
考えています」(芦刈先生)

今後の課題は、18年度の活動から
得た気づきやノウハウを新1学年団
に伝えることだ。特に必要性を感じ
ているのが、ポータルフォリオを統括
する担当者置くことであり、ポー
トフォリオの意義や仕組みを熟知
し、3年間でどのような資質・能力
を身につけさせるのかという展望を
持った教師を、生徒や他の教師がい
つでも相談できる窓口として機能さ
せることを検討している。

「ポータルフォリオの活用や、定期
考査の改善などの必要性を受け止め
切れていない教師もまだいます。19
年度の1学年団との意思疎通を図り
ながら、資質・能力の育成に向けた
全校的な改革に発展させていきたい
と思います」(芦刈先生)